

漁場の有効活用と生産性向上に向けた課題

株式会社シーフードレガシー

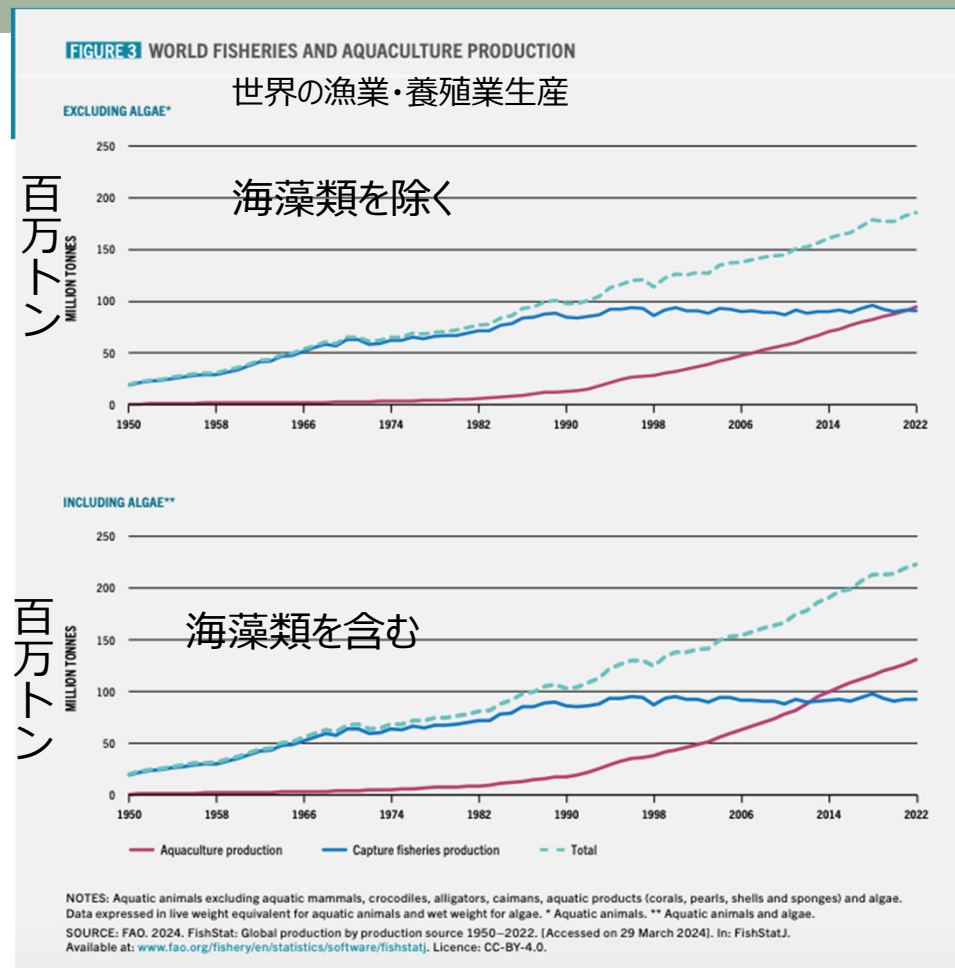
取締役副社長 山内 愛子 2026年5月13日



効率的な水産物生産と拡大に向けた一般的な課題

世界の水産物生産状況

- 天然水産物の生産は1990年代から頭打ち
- 水産物全体の生産増加を押し上げているのは海面および内陸の養殖業
- 養殖業の発展に伴って課題も生まれる
 - ✓ 海洋環境、水質の汚染（富栄養化、海底沈殿物）
 - ✓ 周辺のエコシステムの攪乱（移入種の逃亡、疾病の拡大）
 - ✓ 餌となる原料への負荷（餌原料となる魚種や大豆）
 - ✓ 漁場利用に関わる地域コンフリクト



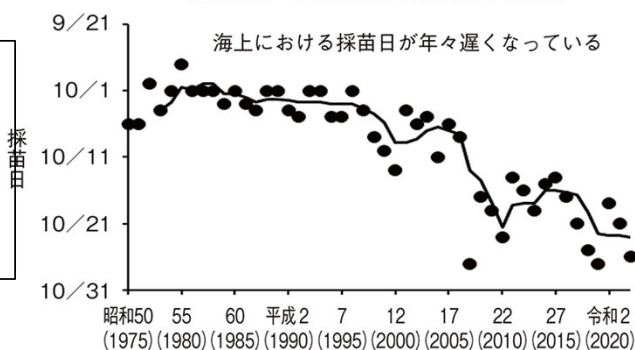
国際連合食糧農業機関「FAO. 2024. The State of World Fisheries and Aquaculture」より

効率的な漁場利用に向けた新たな課題

海洋環境の変化
による生産性の変化

資料出所：令和6年度水産
白書より

福岡県ノリ養殖採苗日の経年推移



資料：福岡県水産海洋技術センター

主要産地



都道府県	2023年 生産量 (万トン)
全国計	12.4
鹿児島	4.1
愛媛	1.7
大分	1.4
宮崎	1.3
高知	1.1
長崎	1.0
香川	0.6
熊本	0.4
徳島	0.4
三重	0.2

養殖生産量 (万トン)

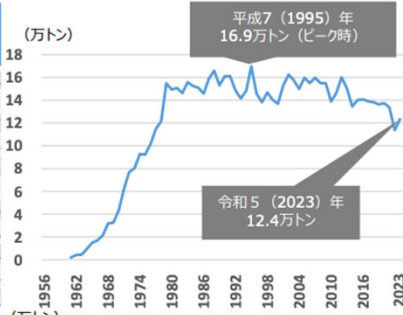


TABLE 3.1: Projected Total Fish Production by Region

	DATA (000 TONS)	PROJECTION (000 TONS)		SHARE IN GLOBAL TOTAL		% CHANGE	
		2008	2010	2010 (PROJECTION)	2030 (PROJECTION)		
Global total	142,285	151,129	172,035	186,842	100.0%	100.0%	23.6%
ECA	14,564	14,954	15,369	15,796	9.9%	8.5%	5.6%
NAM	6,064	6,226	6,319	6,472	4.1%	3.5%	3.9%
LAC	17,427	19,743	20,957	21,829	13.1%	11.7%	10.6%
EAP	3,724	3,698	3,832	3,956	2.4%	2.1%	7.0%
CHN	49,224	52,482	62,546	68,950	34.7%	36.9%	31.4%
JAP	4,912	5,169	4,911	4,702	3.4%	2.5%	-9.0%
SEA	20,009	21,156	25,526	29,092	14.0%	15.6%	37.5%
SAR	6,815	7,548	9,210	9,975	5.0%	5.3%	32.1%
IND	7,589	7,940	10,346	12,731	5.3%	6.8%	60.4%
MNA	3,518	3,832	4,440	4,680	2.5%	2.5%	22.1%
AFR	5,654	5,682	5,865	5,936	3.8%	3.2%	4.5%
ROW	2,786	2,696	2,714	2,724	1.8%	1.5%	1.0%

Sources: FishStat and IMPACT model projections.
Note: ECA = Europe and Central Asia; NAM = North America; LAC = Latin America and Caribbean; CHN = China; JAP = Japan; EAP = other East Asia and the Pacific; SEA = Southeast Asia; IND = India; SAR = other South Asia; MNA = Middle East and North Africa; AFR = Sub-Saharan Africa; ROW = rest of the world.

経営体数の推移と
1経営体あたり生産量



2010-2030までの成長予測では、
2013年には国際的にみて日本の成
長予測が低迷

資料出所：WORLD BANK REPORT NUMBER
83177-GLB「Fish to 2030 Prospects for
Fisheries and Aquaculture」

経営体の著しい減少と生産性向
上イノベーションの必要性

資料出所：水産庁「養殖業成長産業化の推進
令和7年4月」

有効な漁場の共同活用例 – 南三陸志津川湾戸倉支所の事例 –

漁場を有効に活用するための策としての企業経営や協業といった取り組み

南三陸における新たな挑戦に向けた協働体制

- ・ H24年から3年間 「頑張る養殖復興支援事業」を実施
- ・ カキ、ワカメ、ホタテ作業部会とギンザケ養殖6名の計96名による協働体制の確立

震災後、過密養殖からの脱却を図る（区画見直し）

- ・ マガキの養殖筏の間隔を拡大し、施設台数を削減
- ・ ギンザケの生け簀を沖合に移動
- ・ 経体規模に合わせた施設配分



カキ部会による過密養殖の改善と生産性の向上成果



震災前

復興後

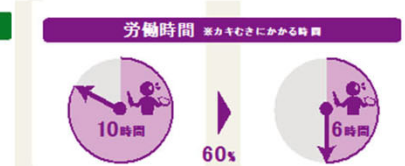
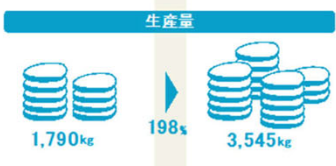
生産量：約2倍

生産金額：約1.5倍

1日あたりの労働時間：4時間短縮

戸倉のカキ部会員1経営体当たりの変化

震災前 2010年 震災後 2017年



※第24回全国青年・女性漁業者交流大会 茨城県漁業協同組合志津川支所戸倉出張所カキ部会発表資料より作成



半年で収穫サイズに



国際的な持続可能な養殖業認証の取得



生産性が上がるとともに、作業時間が効率化し、余暇を家族と楽しむ時間も増えた

資料出所：（公財）世界自然保護基金ジャパウェブサイト

(<https://www.wwf.or.jp/activities/activity/3749.html>,
<https://www.wwf.or.jp/activities/lib/4574.html>)